



浅間嶽面敷草紙後序



逢州執著譚

莖後卷



種彦著

九

逢州が幽鬼巴へ巫を清涼山に誘引
石橋の詭現金色の獅子王牡丹狂事

とまに夜風烈しく中に春の南北に雲起して東南に雨脚よくまげく
浅間の公もよぶよの良治不斗眠覚て枕のちりをを顧れば怪の女ぞあつ
けれり。雨のぬれしる桃眼露に咲嵐に乱る柳登かぶるにうれ羅
後の袂鮮し錦繡の裾斜うらうらかしくおちどろき女客は行人にて
や在らん更に現ともおちくゆらむと慎畏てソひけれハ女うらけしひ。
君はくもやも妻を視忘れしうらあまうまうらぬ心うらと打恨に。

九 種彦著

良治も成も不審をいもつくりらまひり大に驚き。さし其方へ逢州
 けいあつむ。人でのわらうて死つくとサッソ。かひに堪へねけりやうで
 さしうひまじし。健る其方の姿あを頼しと一むびの誓ま一むびら
 存びけり。逢州へ成成悦よる面持にて。妾の君に列れまいつせてより。
 不良も人子にわら。憂や浮世の夢なり。蛛の翼の白粉も風に乱る草隠
 れはま一さ才のなかりけり。佳忘れがさる互の密路。思しゆじいりも
 胸の煙とくくべ。浅間の山も数々も。閑浮にあり一其昔接羅
 と切て方茵とさして。朱房玉楼のうちに眠り。錦鋪を裁く衣を室て
 驚駭空窓のうへに楸比且の酒の泉を汲夕の肉の林に野へ夏の夜
 の楸光へ雲の文ありとのりわがめ。秋の夕の白露へ玉と嫌をもて。公
 けいそのとんもれど。仮にも元常迅速の理をまらざれば。穢土の迷倒

を離し。浮土の快樂をうけんか。もろ。栄耀に飽充三宝を信ぜども。さるか
 け永く八寒の氷に纏れり。く。焦熱の佛鼎に溺べり。を聊孝順の志あり。成
 以て忽ち立障の雲を消除。南方无垢の月をまらめ。覺葉西利乃宝池
 楸ぶ才のなかりぬ。君と妾が縁に。一席に。一が。物諾あり。
 まらび方へ。い。せ。め。く。と。成。れ。が。良。治。も。文。の。夢。現。の。さ。し。ひ。を。ま。ら
 め。白雲に乗じて蒼天に登が。霞を介方をまらめ。或へ白雲花を
 帯て。老松梢と。さ。さ。る。高。山。に。つ。つ。或へ猿猴雲に。吐。び。表。泉。巖。に。灑
 ぐ。高。峰。を。過。り。ゆ。く。て。最。危。き。高。嶺。に。懸。ぬ。と。逢。州。巴。と。函。に。對。か。る。く
 昔にも。強。身。つ。ら。め。成。野。の。唐。土。清。涼。山。と。つ。ら。な。く。あ。れ。に。ま。え。つ。ら。各。に。一
 井。石。橋。さ。り。む。う。ひ。の。文。珠。の。陣。に。て。常。坐。放。の。舞。方。尊。と。言。葉。に。る。演
 か。つ。と。い。の。良。治。答。て。わ。ら。ま。ら。其。場。に。何。等。の。由。縁。を。り。く。我。を。誘。引

山月堂集卷之五

山月堂集

まつりしと同遊州又曰君さつ世に。參茂元文辨濟光の息男大正定基
 とつり人々の。同務の間赤坂の力壽とつる遊君に別を。互に契ひつり
 けるが元常の凡防が。遂に彼力壽息絶眼用ぬれば枕を双一面影席
 を回しつせ。移香も智王終ら姿なれども。色欲の雲執いしごとく。を
 七日をへて野外に送意慕のたへ哀傷の胸を焼別離の涙の愛者乃
 才と侵も。是を逆縁の善知識とつて。忽地に出家して。比叡山楞嚴院
 惠心先徳の室に入寂照法師とつて。六則の才を。四教三觀乃翰操
 を習佛知佛見の奥旨を得つる。ゆへ今生の團司とつて。なれぬひす。妻
 の前生に彼遊君力壽なり。されば君と縁に。伏待びし宿世より。こご
 せり。奇縁といふべし。往昔長保五年秋八月廿五日。才の前生寂照
 法師入唐して。比清涼山に。つる大聖文珠の灵像を拜し。てまら。こご

由縁をりて。君と再び比所に誘ひまら。せり。首尾を物惜らに良治益
 奇異のかりひを。遠近を顧れど。あまりに山を遠く来つと。おびり。
 雲又跡を立隔。樵歌牧笛の声さ。もサそ。和らたら。て石橋を
 見りて。其面僅にして。若ら。るる谷ふ。る。泥利牛も。浪の
 虚空を渡ら。く。雲に聳る粒ひを。誓言。夕陽雨の後に。虹を渡
 せら。と。又。を。姿に似たり。滝津瀬ハ雲。落ちて。
 数千丈の滝。坪の。秀ら。る。に。人。の。毛。も。い。ら。我。を。も。
 石の最危く。かり。る。石の橋なり。さて。是。吾日本。も。その名
 くれ。る。石橋。なり。何代。つ。る。作。り。て。言。入。
 遠州曰これ天地開闢より。の。雨露を。く。じて。圃土を。け。る。是。則
 天の字橋と。も。其外圃土世界に。わ。橋の名。所。を。ぐ。い。て。水波

の難を逃れ萬民富せ成渡らむ。是皆橋の徳なり。然るに此橋は人間の渡せし
 橋の如く。舟のれと出現し。舟の石の橋されば石橋と名成りけり。
 其面僅に尺二寸の狭し。其長三丈余に及ぶ。上に滝の糸雲より。
 山河震動して。雨塊をふくむ。その名成り。高僧貴僧も。あつ
 け難行苦行捨身の行をせし。さうり渡ぬ橋に侍り。されども居る
 前生に丈徳のさあ人の。さふふらら。さあ石橋をもちけり。
 文珠菩薩も。此拜の人。ちちも。演けられ。良治も。初て寂照法師が再生
 なる。成り。起縁をまき。さあ。先文珠の浄土と。やんを拜し。と。
 石橋に。さあ。若さあ。て足も。た。目も。ら。い。か。も。ま。え。神。亦。及。仏
 力のあ。さ。ん。ば。渡。ら。ぶ。も。い。び。ぶ。れ。ど。逢。州。の。袂。に。携。り。辛。く。向。り。岸
 への。う。ぬ。い。う。で。崎。嶇。あ。り。山。の。形。に。い。ひ。ま。り。て。地。平。ら。と。堂。乃。と。く。

吹瑠璃の砂をもちて。王の礎に構且の柱を。黄金の樓臺珠玉乃
 殿。閣。又。米。赫。も。も。る。綱。と。連。延。と。て。莊。嚴。又。に。人。界。に。比。さ。ま。お。さ。る。孔
 雀。鸞。の。八。功。徳。の。池。に。啼。く。鳥。雁。鸞。の。空。に。翔。舞。の。宝。沙。に。食。求。時。に。蕭
 笛。琴。笙。後。夕。日。の。雲。に。響。け。り。歡。喜。信。樂。自。生。也。是。正。の。天。樂。也。奏
 和。雅。音。を。賜。發。し。无。量。覺。を。供。養。す。も。さ。つ。ひ。つ。べ。し。逢。州。耳。を。歌
 絲。竹。の。調。ま。さ。あ。れ。影。向。の。時。節。也。今。幾。程。に。よ。も。過。り。暫。く。も。そ。の。人。と
 折。り。も。金。色。の。梭。猊。二。蹄。奮。迅。と。く。現。れ。て。枝。と。烟。と。嘆。れ。れ。る。
 牡丹に狂と。と。つ。逢。州。も。さ。ふ。真。に。い。つ。も。扇。を。あ。げ。く。頻。伽。の。啼。く
 声。を。い。う。

獅子園乱旋の奇樂の柳牡丹の英昔は元大
 獅子頭のてやもやせ牡丹英牡丹芳黄金葉

現て死に渡れ枝り作轉冥とく人あり獅子王の
 勢あびりぬ草木もあき時あれや万歳千秋
 と舞ぬまでけれ彼獅子王も共狂ひくると見え折しも紫雲
 魏りく是正に文殊菩薩の歌向とおどし善巧丹菓の唇鮮しく富
 智金花の容園からさ仏満月の如き光明を放り獅子の座にかたり
 のひけ化ば良治愕然とく只管待りきり逢州又曰見えくま天
 堂に化樂を文とくく父の讎を討ふる念ふ刹那も忘るまじ
 故をりく君成妹寄居虫が雨居に誘引まのせり又仇人の姓名の
 告まのりくおひむ自來おひひ當りゆふとあまのりくかを添
 雙成討せぬれとつて涙を階然と落し憐むまのりく時をのり方
 魂忽ち瞿麦娘を狂死とく今共に空同地獄に墮苦辛無量まれ

三時を過ぎ南方より老僧のつとあえりまの化身なりか乃
 僧に諾して抜苦多樂の法養を勤む人かあき奇瑞ありつと
 ともこれかま余波のりつとつひひけければ良治驚きまら
 少時付多入の更あきと裾をまるとりく彼寄居虫がうら
 掛り逢州が桂を抱て夢覺す時異香一室にまらければ良治奇
 異のありひをば傍をうりまらにまられまら名香とおわく空柱
 の金色の蜘蛛一雙儼然とくま通る輪と瑛と光景を信度まら
 実風悚の夢うりまらまらまらまら世なりまら遠む逢州もや亡人の
 教のつとひを夢に告りゆめん又雌雄の獅子王とつと一雙又の
 條からんぬの扱とつとあき誰まられまらと拍り足が頓而奇
 居虫小獄し助兩人内前にまらけりまら良治ひけり先小女に問まら

あり。此奇南ハ正しく我秘蔵とらるる。白牡丹とつる名香とおぼく。
 去頃此君逢州に与つし他に所持うも者ありとておぼく。又逢
 州が執好しく。後狂申桂とつひ我素心あり。一定此方の彼に由縁
 ある者ありん。つまもて語りてよと仰られた。寄居虫も頭をさげ。君ハ
 浅間良治公にくごであらう。小織の後にせはく。妾もおどろまはれ
 う。君にもおねて俚名ハまゝありや。つることもありん。妾則逢州の妹
 居虫に侍。父園の一存。非命に死せ。一條ハ必定姉逢州よりまゝに
 一とおぼく。今又ついにおぼく。又ハ茶道の侍。出ハ乾坤二卷。姉
 妹ハひまもつ。持し。折もあ。君にこそまられとある。父の遺物に
 此とて。姉逢州が方のうへへも又なり。此は杜能花が自害の
 と。田字草の老女と親子の名告せ。父の讒言を討ん。袖おひと

なり。一と。徳てありしとも。おぼく。こと語りける。良治も。かたわくの茶
 振と感。今此方のつる。も。逢州より。様にさけり。又茶
 道の侍。去も。そに我よ。と。半に。支の。豆。本。ま。あ。そ
 ひ。か。つ。ま。え。才。に。一。巻。を。首。尾。全。く。合。度。さ。う。と。ま。び。つ。嚮。に。寄。居
 虫。が。執。好。ま。つ。る。序。に。さ。う。と。て。賤。布。を。う。ち。か。り。く。熟。視。て。あ。の。や。し
 べ。是。こ。を。琵琶。魚。と。つ。る。魚。の。皮。に。つ。ら。れ。る。賤。布。に。く。我。あ。の。う。ら。に
 金。は。お。さ。り。也。才。の。父。に。諾。せ。其。夜。殺。害。ま。り。金。も。棄。ひ。ま。り。れ。し
 よ。し。ま。け。り。つ。ら。れ。し。再。ハ。此。皮。は。つ。ら。や。と。同。小。織。と。助。曰。そ。の。と。の。小。子。小
 女。に。同。く。祥。に。ま。れ。り。其。金。の。如。け。の。故。に。杜。能。花。が。より。や。り
 たる。れ。ば。原。ハ。星。敷。土。ち。の。所。持。の。賤。布。を。う。ち。と。つ。に。う。り。良。治。督。も。素
 心。陸。奥。に。く。土。ち。を。追。放。せ。も。一。存。が。村。に。つ。る。も。月。日。と。ら。ひ。珠。に。此。布

巴く巫牡丹に相ふ
椰子王を夢視
つるが覺て
白牡丹の香烟の金色の
胡蝶舞花のいろ



○此州が柱の意とていひし
とていひしとていひし

ちよら
 を河持をばりし考れが一本を村より金を奪ひしそのはしを
 せんもとるべし。郷の夢に逢州我に向ひ敵の姓名の告ごとく
 自本せしひあそとめべしとつひつらん。必置是きべしとつひ
 けられ居虫
 小権を磯とらしそれにておひひあそとめ。あそとめとらしと戦ひし其ま
 形を隠し幻術をやまふひし。父の今敵のおがうに恰も符節を合
 とがら。既に敵は彼をばりしと。まらあそとめとつひひひ。まらあそとめとつひひ
 める。證據のあらし人の切平が飯をく後。まらあそとめとつひひひ。まらあそとめとつひひ
 ひまもあつ。微笑を勇しくする折りのあれ。切平一人の老僧伏流し。まらあそとめとつひひ
 友りけるあつ。居虫もあつ。週刻りの一二をおがうりければ切平
 も奇異のあつ。まらあそとめとつひひひ。まらあそとめとつひひひ。まらあそとめとつひひひ
 也。老僧の最る氣かりに。深く帰依し。行きの人なりやと問。切平は我も

行地いづる人といふ人ぞこれと只雨にそむち行芳ひまをこゝに忍ぶ
 こゝろひまのせうと存て良治忽地夢中に遠州かひひ一と成りひ出
 老僧の成りて上坐に成りて叮嚀に礼をうてひひけら我箇様こ
 の冥夢を見たり。又如けこの苦あり。世には家の南面されば南方より
 いづる僧ありて果して老師のてまはし頭を大徳の功力に依て時を
 鬼を慰し成仏得脱するも人とは只管に頼ければ老僧ありて辞
 色を我も一丈夏の因縁ありてまはし言葉を耗し身も夏あつれと
 珠数を袖に持てありて上り。何やうんはのうらひ唱とこえつる時
 何悪くと物とまはし遠州か棘瓢鉢として。まはし人のまはし
 老僧の傍にありて何方とまはし悲しげう声して人間萬変碎泥
 のど。氷の上は降雪砂の上にあつたのどまはしまはしとまはし旁紀

人といふなわら。今の輪廻の心をまはし。かうせがまま永劫にも何人
 指をとりて生死の海とほしん意の闇深まらかしの安婆世界と雨
 とはまはし声われども文の姿に足るまはし。や成桂の思きて老僧の前
 に胡蹄に似たり。老僧曰はるるのぞ又桂の声ありて。妾は則良と
 の側室時をとりてのめり。命終の鬼神无回地獄に墮し。刹那も噴責
 乃回るといふ。大位に化美にわづらんとも。姉の桂に陽世乃。哀を
 再あり。老僧又曰はるる地獄に墮し。あは患る。回とや夫佳人の
 才子をとり。才子は佳人を愛も。女は容の艶し。姿のまはし。を寵を
 け。才のおとまり。試さるるわづら。妾十分の艶色ありて。幸に
 して君と横陳あり。り。才が忽ち醜婦とわり。毒茶酒に和。飲し。故
 故に。采叟妻が所為あり。それの。小棟。舞振の二人の女。重共

馬と生を棄てて。盤石の室芥して苦患をうらむ。舊はくやあうけん危いて
 やのうけん。偶人天道の善果を得る。六塵六賊に奉公とうむれ。愛
 別離苦の炭海よりふはしそんくども。同法隨喜のよめふく一法もあわらむ。
 凡らとやその罪障を積三途の故郷に帰ると。幾多度をや。汝縁ひくれ
 境にぞうらう。いふはげし理をあらむ。同我妙者断惡術善聽我説者得
 大智慧知我身者即身成仏と。責むりく祈らるる又説てし

日まければ夜も月まければ曙の

山和卓港にけつぐとげもせも生れておぼたもせもひぞと
 のれ持念珠うらわげて。袿を丁度うらぬ人ば又行方ともう声あうら
 め難有丈位の教化とりの迷ひの雲霧晴けり。一相真如の月の光
 愛名の冥路はてし。仏性自然の理をあら。今ぞ成仏のゆるるとし声

きこへて。虚空には雲棚の青蓮の華行くと降来り。妙なる音楽遙にきこ
 り其光景良名が夢にうらと一点も遠らむ。是も又夢にやあうらと行り
 けり。室に空居虫が母於杉の逢州が墓前にも向んと。牡丹を挿る花白
 を手に持たる巻をうらうて。忽然とて金色の蜘蛛雙をびこらう。往
 つ還つ香灰意ひ露灰嘗翼と撲顔と揺。携持牡丹に狂ふ人て
 ぬれも。緝こころと戯ければ最のや。まことのやひ。蜘蛛の巻かこれ付
 て歩りぬ。ある草舎の前にて。是則空居虫が隱家なり。於杉の外
 に傍徨彼老僧と時ちの冥意の問答試詳にき。空居虫が舎かりとる
 あるとくども。流石にらめら。頓にららむ。は時衝こころり。
 めりしとも。あうら。あうら。懺悔して。誓試松ひ老僧のゆき子とをうらぬ。
 鬼角のうらに。夜も深く深ければ老僧の別れとつげ。とらうらんと

教化すのひりに疑ひはしと感候袖と絞けり切平の最前より黙々と
 して尋らるるがよの時斷くワ成ひくも逢州ぬ又時々の内方よりえ
 お不思議に仏の化美にあづかり成仏得脱はるひ其の敵の午がうも
 まれしとあれは彼土右馬つが首と削る父君の姿を怨しむるにまじり
 一脊居ぬ最期の折れ我ゆへとも彼牙に往かうとれど隠眼の術を
 して姿と幻のまじりつるの面伴はまうと視きりまじれど彼を成美に糸
 板金割をよまじりし鄙びる面子を歌ひつるにまじり声のあやのや折れり
 彼星は玉をふらとやうへ今入行地に隠れむむのかりに我彼に面會て
 律のやうは探すと言はれ近くわらふ彼は故湯元忠の患者なり何
 地に在るもこそうなりと逢州ぬの最期より五下赤どのの勇氣にや
 怖けん絶く柳巷にもまじりつるはあやを自害とも彼衛公と安ら

頃日又甲屋とつる茶亭にきてう日夜酒宴を催すは是究竟のよりのあり
 ともはは老女がてびきりてまのせんあつてつてき甲屋におりしま実う不
 じしりへとつひけれは良治頭とす否々彼の隠形の術はかまひ五下赤
 入討りしせ一曲者なりかうらま女のカにて討るを文かひつは又彼が
 妖術は折計束ありや夫まうまやとつひのり寄居虫をくこれに
 父一脊今殺れぬとてつひつるあり境は元无心にして其光明に故に
 鬼魅妖怪も奉侍はつてかじ彼幻術をむとまじりてのくも境はりて
 照とまの姿と頭さん必定向と接神記抱朴子の僕書はまじりて
 物語はるはら故に古鏡をりとも常に肌才をまじりて所持はひまうと
 正心とまじりてつひけれは良治殆感なりは時於枝の扇と坐具とまじり
 念仏唱わたりしが符いさる牡丹花一輪扇のうへに落ければ良治も



観音の化身
 旅僧となり
 教化あらん
 時の聖神地獄の
 呵嘆を脱れ成仏
 ひととあり

黙頭て腰扇をもちひくま。坐具と色する扇のうへにうち重くひけらる。
 我需に清涼山にありしき。夢に獅子王とつるも。覺てら一奴乃蜘蛛之成
 ぬ今もは腰扇と重くその形に翼をかこめたる蜘蛛に似たり。されに社
 丹のふは花ひ獅子王の頭にかざり。散樂獅子舞を今様につらほし。
 寄居虫ハ八指とら獅子舞と姿をやらし。土ちらに近づきそ。やもく
 敵と討とるべし。逢州が幽重奮迅する獅子王もとも。在ひらふよく舞
 かなでし其詞と。よまもなはたわびくありと。扇をさうてさうくとおぼし
 ちへ又ひけらふは小織曲の家のお臣雪枝除むと。入者の一子にそ
 初るどく女とつべし顔色あれど。力量もあまの若人のあまをわたり。又寄居
 虫ハ男も恥づき勇気あり。殊に姿のなはたやまざる。雄登雌鳳よき一対乃
 夫婦あり。こはゆくとつらに互にひかへ一つ人もあはじとまら。今寄居

に強成むもひ共にかと合く。仇と討人へつらにひけられ。於枝切平を
 大にまびそれらと。おびてまき幸なり。寄居虫にもそく養せらる
 せんとも。ひれと顔と頼るは油の振とも。うとつて。えに一言の詞
 する。小織も助も退きからして。並居も面をげり。良法の願趣とまら者
 りれば。こやも彼おが意中決まり。行はれ二人とも。我言幸ふをひら。こ
 かわゆれば。是より猿籠にまきるべし。其後よきなまらる。つら寄居虫
 小織も助も持く。館にわつら。家臣に命く。復し婚姻のそりむと。びと
 かなつら。つらひらる。

才十

寄居虫獅子舞に打拵て仇と討
 古鏡の威位土右衛門が妖術破る事
 星歌土右衛門の老女於枝のつら。けらつら。御所の五郎が勇

きんか 氣烈きにあそれ 柳巷はらうもろくはけしに 彼ハ主人の寵愛他に異
かる。逢月代殺害也。其分説すく切腹をせしと風也めればこよし
公あらしわるといふ。是も我と賺く討束はやめんと忽地狐疑の如代懐
きんか 手下の者試つていへば仔細と問せ漸く枕をさすう眠りけりこそ太九
六素兵吉の日毎土ちらが院家にききり。首領は行そくか ちりりから
けく退のし柳巷はらうは杜能たにまらるるたもめいふまにとこめぐに効
め。門子の悪棍とらうられ日暮うらに街を徘徊はし例の朝当三言葉外も
よかこつてけく宣呪と買性束の妨とらうとこくど彼ホが根籍とあそれ
難めつてそりの者もみりけり。叔一日土ちらうの西人の手下へあそく彼
甲屋はらうけり。主人の家へあそく四十をうらとあやうて祝熟さる男
いで向へ坐敷はらうまひければ土ちらうは行りて由徳と問彼男答く曰小

子ハ甲屋の隅にてひが主人頃日病めりてき。客は餐食もつてまこと公に便
せどさる故にてゆのれは別室に移り。小子とそめんとはけりゆめりて向まし昔
かりと。柳巷はらうせきふかりん。あそくど坊せりて。頃て酒肴と持ふ
けり。は主人を行者といふは是則切平なり。いつと土ちらを仇敵なりと見
まへめんそく。仮に甲屋の主と打拾も悉放板がたりひかり。かくこ
切平は土ちらうがしらうらうひに似てそめ又彼が声き試やにたうら
まてちりりてさうらあり。十に八九分の敵かるべと公に毒びその席は
ちりりてさめわねては家にはねまもはに小織は助家居虫と閑室に伴ひ
ていひけり。小子は甲屋の主と偽り土ちらが為伴と窺ふ。一奇居代
害しと敵はらうがひめり。是天のちらうさうらうれが鬼ても角
ても今宵のうらに宿意と晴さそべ。かち小織の及男姿はる居

のく土ちらも敬りら身よりひ君にむ成ゆとほは整をいれて女めりく
 髪といひあげ空居虫さありうとも弄妓とりりう。良治君の宣ひしごと
 獅子弄に打拵故に近う。幸意と遂せり人のまじ又空居虫さあり
 牡丹小織のなへ小接とほにた各ばよとぞ我の只管土ちらつに酒は強
 酔と度して後かこに満ちるのせん。其用意と測くをえの座浦にさら
 つで大盃とめぐし既の酒を園とかりけるさき切平つひける小子近ぶろ
 りかへる弄妓牡丹小接といふ二人あり。某の社に神楽のいへん練舞の
 いつごさんご。獅子弄とまじりせむ。此呀はうひつご一指弄を酒燕
 奥にそる人ゆんやと同ぬ土ちらの上座にめぐるめく。寛々と然頭とそ
 まそる人のまゝ親物うへん。まづ此席に振き彼ふ二人にめとそせその
 う人弄が成ものむびごとつひければ切平さあう。牡丹小接つとまじり

方まてるどとびつて言葉にまごひ頼て空居虫小織と助の兩人弄妓
 の打拵さるるに粧ひく坐いつまぬ土ちらに彼あか敷うの容貌とそるか
 よ。まがむとまじりま。近くまされよおがるとありと。兩人と右左に居
 り。我れくつと互にまじりおとぬ色香めれば共れたの王といふ主のお
 むまにて。牡丹小接といふうとくけれど。牡丹に牡丹草のなめり。接は夢
 しごとく。見草の異名あり。かておる百夜も厭ふ成。牡丹といふぞ眼か我れま
 ぶりの契といふのは。今昔とくに結びまて園に植めり。おとすう。
 彼楊妃が弄せり。一巻紅神に行き盛と延泊言が愛つる花さうたうが
 いたおにむとぶつこと。只幣よとらひれければ空居虫ハ怒氣に堪ぬ。
 土ちらかそとへん。ばつとばし。からからんととも。面持と。小織と助とへん
 とむづき。牡丹とくと便宜成うかんと。つひつくとを忘れくと。押隔り

て和れど。文はさまるけしき。今氏期と延る。又りつる。対しき。どいや討
 けらま。い。や。い。其。呼。の。ま。小。桜。の。と。牡丹。の。成。息。き。あ。く。
 裾。を。折。て。さ。む。入。土。ち。ら。信。度。う。ら。ま。う。さ。う。へ。さ。女。が。為。体。行。と
 う。つ。と。向。か。け。ら。れ。れ。織。曲。答。く。り。妻。が。ま。ま。が。り。獅子。舞。は。ハ。採。と
 つ。と。あ。る。牡丹。の。い。ま。い。い。も。彼。八。採。と。う。て。は。く。ぞ。は。く。と。土。ち。ら。又
 曰。その。笑。い。て。あ。る。あ。ら。ば。疾。奔。く。と。と。と。望。い。り。辞。さ。る。色。き。西。人
 坐。と。さ。ら。あ。る。扇。と。か。さ。ね。て。獅子。の。頭。と。つ。る。是。を。頭。に。い。て。色。ど。の
 羯。鼓。と。胸。に。あ。ひ。ま。い。る。牡丹。の。花。代。り。う。彼。呼。の。坐。浦。に。練。つ。て。西。人
 と。有。く。と。わ。ぞ。歌。ひ。つ。て。け。し。

吉野 龍田の花紅葉 更紗 越路の月雪
 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子 獅子

土ちらへ。秘曲。と。れ。猶。と。め。る。盃。の。酔。と。も。り。眠。も。ま。さ。る。光。景。に。寄。居
 虫。は。ま。り。れ。ば。又。眼。と。も。ひ。き。盃。を。と。り。あ。る。も。と。ぶ。ら。れ。ば。と。小。織。の。助
 寄。居。虫。に。目。を。な。せ。し。獅子。因。乱。旋。の。安。樂。の。柳。牡丹。の。英。あ。り。は。満
 大。ま。し。ア。ま。ま。の。獅子。頭。う。ら。ま。や。せ。や。牡丹。房。折。節。は。と。く。西。人。の。牡丹
 の。花。も。さ。う。と。ん。れ。ば。枝。の。ま。の。に。氷。の。双。振。の。袂。に。あ。り。し。彼。獅子。頭
 と。と。や。う。と。目。を。ひ。き。袖。を。う。れ。つ。も。立。奔。け。り。ま。い。と。ら。む。む。き。と。り。
 教。を。手。ご。ち。に。ま。り。け。り。浩。呼。へ。其。菴。に。ま。り。ひ。し。梶。原。平。平。袂。父
 の。重。助。と。と。め。究。竟。の。若。者。障。子。の。か。け。り。あ。り。の。れ。の。く。狼。狽。さ。の。い
 土。ち。ら。が。手。下。と。さ。ら。く。も。さ。は。奴。の。吾。們。が。と。ま。ま。に。さ。ら。う。ら。ん。と。さ。く。本
 意。を。達。せ。し。と。授。の。け。つ。玉。ち。ら。が。側。に。い。り。せ。ま。つ。け。も。土。ち。ら。の。何。れ
 由。縁。と。い。ふ。と。公。ま。り。し。也。才。木。我。を。な。し。と。う。と。と。寄。居。虫。が。小。織。の。て



花
館
杜
松
成
仙
三
三



甲
屋

寄
居
虫
小
織
助
獅
子
歌
妓
敵
土
右
衛
門
と
討

幸
善
言
卷
之
五

つまらざるを小織と助いふは陸奥にあり一時蛇田村の地菰堂に居
 れり。老人を害し金百兩を盗みしをいひしとありん。おがくありやと浩の
 る。おちらむと打笑ひし。其老人を我害せしと云ふ。燈投あり
 ちと問ひし。寄居虫彼賊布と云ふ。は日外社能たごのいふ
 するは賊布の琵琶魚の皮をく作りて。良治公の所手運におさ
 ありと。おはしこの由探りて。妻が父あがりやせ。成今汝が呀おら
 とのひ父の最期に其方が追放せし。内日されば。款に疑ひあぐり。は
 と。いふをたまふ。切平もかへ。おらるる刀の柄にも。はらぬ。いふひのひ
 一その人に隠形の術とおらるる。是又一つ。の證據なり。我も甲屋の
 物と云空言汝にぬか。討れ。園の一歩が下部切平と云ふ者。を
 夜折と。彼呀は走つけ。主人といふ。り。餌しが。遠に。ら。な。く。ま。り。あ。ふ。

斯くいふに逃ねと。ま。り。て。井のひのま。り。う。め。敵と名告て討れし。と。二人奇
 しくつら。せ。り。玉。ち。の。も。刀。お。り。ま。り。ま。り。女。あ。つ。ま。り。我。油。の。い。り
 追放と。れ。路。費。に。た。ぶ。き。金。成。ひ。ん。と。志。人。を。害。せ。し。が。不。知。彼。の。右。主
 良治が茶道の師団の一奇と。い。者。は。て。浅。間。の。箱。より。め。つ。り。や。せ。
 金。の。歌。妓。の。杜。丹。と。つ。つ。女。の。則。園。の。一。奇。が。娘。は。て。途。州。の。妹。寄。居。虫
 又小織と各のり。の。浅。間。の。老。臣。雪。枝。弥。若。方。が。一。子。目。名。小。織。と。助。良。治。公
 の。命。に。よ。り。て。寄。居。虫。と。婚。姻。を。せ。ば。我。と。ち。の。外。父。の。か。き。お。か。か。る。志
 我と討ん。ど。計。東。は。く。め。り。し。の。つ。つ。い。も。一。奇。と。や。う。ん。と。ま。せ。し。ま。り。の
 玉。ち。の。い。り。の。う。け。り。ぞ。あ。る。も。其。夜。の。朧。月。下。部。の。顔。も。ま。り。ま。り。あ。り。ま。り
 は。家。の。主。と。お。ひ。小。織。と。助。の。え。未。知。年。の。割。り。れ。は。是。以。て。ま。り。ま。り。か。く。や。ま
 ず。と。信。に。せ。し。れ。り。我。運。の。傾。と。あ。ら。る。先。念。に。暗。と。い。ひ。ま。り。ま。り。の。女。未

さぞまじひありんが我に健なり双牛あり汝もよつて我首を討んぶら成。
 安閑とありてあつるべしや不便すれども及討んまらぬせんぞ借せよと
 刀ぬき持ちしりびり三人もあつて、板合少時がゆつて戦いが原素小織の助へ
 剣法で熟練させし若者けり。其上長命に依ての助太刀つれは命を塵若
 よりもかろんじ。ちよつと切むもびけりんより。土ちんも彼が早業に敵
 か。やも、先くくをるが例の秘文と習つと奇く、姿の文にえどなり
 て白刃の空に躍り。まきもあつて打ちけり。空居虫へ公ひて兼く
 用意せしあまの右鏡をとりてさつつけに又金色の蜘蛛ニラソんごもや
 表まきより彼古流の光りと助け、儼然と表れれば土ちんが姿元の
 に現るり。かりしる三人大い力とぬ。遂に小織の助が切むし刀。土ちんはけ
 損じ。右より袈裟衣にまきさげられ呵と叫びくたされ伏せ。空居虫も

イセよりて父の敵がぐんと。遂に首とちり拵に。三人奇くくまはる。三
 ちんが首と水盤にて洗ひまきより一脊が位牌に付けり。於板も過刻
 ふうん、まきとてさつ次の間に現わく。かさつにやどやるるごりい。
 今土ちんが討りしとて。漸安堵のまひひをばしけ呀に。さつと
 共にまきみつ。まが位牌と伏拝ぬ時に二つの蜘蛛ハ彷彿とて。土ちん
 杜能たか姿と化し。あつて敵がや。まき年の宿意とてしす。せん
 ちん、ちん、ちん、中右のまきより影身につまきまきつ。せ、今うご成
 ちん、ちん、ちん。又えの蜘蛛とまり。虚空庭に表れり。けれはまきも奇異
 ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。杜丹に。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。
 家へ。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。
 ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。ちん、ちん、ちん。

是老の二後よりける。借野人五下。花がも下の善者。九六。素兵五下。わらわ
 らへくひもまありけれ。小織の助めく其方と謝。は兩人の悪棍。良治公
 のありとも。も吉幸りて。後ちそ。衆も角もさう。ふんと。縄つまひひきこく。
 いふ。良治公の旅箱に。赴きたり。あて良治公へ。復讐の一條。詳に。まま。
 め。これ斜う。どま。おびり。八素平。吾々九六の。兩人へ。さへ。罪なき。老るれ
 命と助。おひ。放つ。と。伝へ。の。い。兩人も良治公の。仁心に。感復。ま。
 あれより。善心。い。さ。あ。つ。ける。お。小織。助。け。の。あ。ま。この。加。祿。を。さ。げ。さ。う。
 の。さ。う。く。空。居。虫。と。婚姻。さ。切。平。も。武士。に。さ。り。さ。て。か。の。陸。奥。に。お
 て。さ。う。さ。う。て。後。於。杉。の。彼。一。斉。か。う。さ。れ。の。蛇。田。村。の。地。孫。堂。に。庵。を。築。か
 一寸。八。介。の。正。觀。を。見。は。念。於。仏。と。は。公道。堅。固。に。く。世。は。や。さ。く。か。う。り
 け。又。良。治。公。年。も。若。う。く。さ。い。や。い。世。は。た。あ。う。さ。れ。の。鯨。い。く。あ。う。ん。こ

わ。か。る。と。老。臣。の。さ。め。に。ま。う。せ。故。あ。家。り。再。妻。を。受。室。夫。婦。の。中。ひ
 睦。女。男。女。教。母。の。子。と。い。け。昔。に。倍。と。家。富。采。る。と。つ。つ。バ。さ。う。なり。斯
 め。で。ま。折。り。往。年。ま。な。つ。つ。清。涼。山。石。橋。の。光。景。を。う。さ。ひ。よ。の。傍。
 小。織。助。に。弄。弄。し。め。ひ。が。後。代。に。つ。つ。る。流。曲。は。是。等。の。支。より。折。り
 けん。例。の。年。は。狂。も。空。土。豆。最。ま。う。か。ま。備。し。唯。善。なる。採。悪
 ず。亡。の。天。理。と。童。に。教。る。絵。續。ま。れ。襖。も。多。る。づ。儲。の。君。子。さ。の。ひ。
 と。ゆ。り。あ。く

全部 筆者 中 乃

浅間嶽後俊逢州執事譚五之卷 大尾

附言

一書一点の實は唯戯場の古くより中しる。浅間が岩乃狂言の
 ようて漏がゆゑ。面影草紙といふ。亦後帙を執着と標題せし彼
 狂言の尾に獅子奔あり。石橋英獅子執着といふ。石橋の謡曲に
 わりてふを家くに口傳わへけむ。其名をもかりて執着譚と
 よふのこ

後帙著述の臨で側に入ありて又戯場の獅子奔の扇を重て獅子の
 頭をけらる。謡曲を月よりそふ。予原素謡曲は跡し。爰にわらわ
 つくを月を誦に是又復讐言彼書に友治あり。けとに良治あり。月と
 つしそれといふ。對句に似たり。扇ををまねぶる。浅間のけり

幸よりととも固ありて總々時合とよむ。故に復讐の二波のけり
 よりてけり

人多大にけり。よけたり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。
 物語に見し。前編後端喧嘩買ら。係も彼書より。編を。持君乃
 五夜。そら。曾我。持君乃。舞女の車にて。おな。おな。おな。おな。おな。
 たる。水。和。水。徳。年。間。乃。物語。ふ。れ。持。君。乃。姿。な。い。ふ。あ。り。け。ん。
 たる。飄。草。紙。の。巻。末。乃。い。か。り。き。書。の。専。今。條。を。守。り。文。の。中。昔。乃。
 さ。は。ら。く。脆。條。百。色。深。墨。紙。乃。圓。結。か。ど。け。り。古。今。乃。遠。水。是。の。に。
 か。き。り。き。
 茶。乃。湯。八。束。山。殿。に。か。り。三。弦。の。水。祿。乃。願。より。わ。あ。か。れ。い。母。今。乃
 か。き。り。き。乃。水。和。年。間。に。そ。乃。を。か。ける。を。狂。言。綺。語。と。え。し。は。り。

因に四竹節乃起はしし羊九節なるべしはしし節も羊九節
 こもひひり偏を都町をり類種をわりの其語略今乃四竹節
 似る竹をて抽子とるハ夫よりふを後のとる

編者

榊亭種彦



畫人

蘭齋北嵩

續ふとの昔本偶

かむへとよき答の
 四ウ蝶ノ

燒下編ごうのまんてむうくく乃三茶がらひの字との言とがこと乃

わも狂花乃於香傳其各のまよゆる長崎節本手端手
 てふ由子にありひ振向のまよゆる近松翁が鎮後椽の正本
 として世話小時代をとりまをせし四乃胡蝶の因果也詔
 わられにやうも冊子あり

繡像別人 朝倉伊八

文化九年壬申

心齋橋通

監屋長兵衛

孟春茂兌

善林清兵衛

周板所

中村屋幸藏

